まえがき

音読とは、「声に出して文章を読むこと」です。

国語の授業のみならず、たくさんの場面で行われます。毎日の宿題になっている学級もたくさんあることでしょう。

音読をする効果は、「脳の活性化」「集中力アップ」「読解力が身につく」「語彙力がつく」「ストレス解消」「感情のコントロールができるようになる」「コミュニケーション力がつく」など多くのことが言われています。音読の力を高めることは、様々な効果があることは確かです。

とは言われても…。

先生が、「いまから音読をします」「今日の宿題は音読です」って言ったら、「やった!!」と思える人は少ないのが現実ですよね。

「間違えたら恥ずかしい…」「めんどくさい…」「何回も同じものを読んでおもしろくない…」といった心の声も聞こえてきそうです。

この本は、そんなみなさんに少しでも音読を楽しんでもらいたい！ 音読を好きになってもらいたい！ と願ってできた本です。

文章を読む際には、文字を目で追っていくことが必要となります。書いている事を理解するためには、一字ずつ文字を認識するのではなく、ひとまとまりの単語として理解することが求められます。そして、単語と単語を結びつけて、文章として理解しなくてはなりません。音読は、さらにその読み取ったことを声に出して読むのですから、決して簡単な事ではありません。

しかし、個人の差こそあれ、音読は、くり返しおこなえば必ず上達します。うまくなっていくことを実感することができます。

この本では、「本を逆さまに…」「トレーニングしながら…」など、いつもは経験したことのないような音読の方法がたくさん登場します。「先生やおうちの人に怒られないかな…」なんて心配の声も出てきそうですが、成功するまで何度もチャレンジしてみてください。必ず音読の力がアップします。

さあ、あなたも音読マスターへの1ページを開いてみてください！

もくじ

① ノーミス音読……4
レベル❶『狐のつかい』新美南吉……6
レベル❷『枕草子』清少納言……8
② タイムアタック音読……10
レベル❶『寿限無』……12
レベル❷『日本国憲法』（前文）……14
③ 逆さま音読……16
レベル❶『おなら』コータ……18
レベル❷『注文の多い料理店』序 宮沢賢治……20
④ トレーニング音読……22
レベル❶『1・2・3！』アントキオ コタ……24
レベル❷『ソーラン節』……26
⑤ 笑ってはいけない音読……28
レベル❶『創作シンデレラ』……30
レベル❷『関西弁桃太郎』……32
⑥（　）抜き音読……34
レベル❶『どんぐりころころ』……36
レベル❷『犬のいたずら』夢野久作……38

① ノーミス音読

ひとつも間違えず、少しもつかえず、すらすらと音読すること。だれもがあこがれる姿ですね。

しかし、いざ自分がみんなの前で音読するとなると、全然すらすらと読めない……あんなにたくさん練習して、家ではばっちりだったのに……。といった経験はないでしょうか。失敗してはいけないと思えば思うほど、人は固くなり失敗してしまうものです。日頃から、この緊張感に打ち勝つ音読に挑戦しておくことが、あこがれの姿に近づく第一歩です。

いきなり最後まですらすらと読めなくても大丈夫。ミスをせずに音読するにはコツがあります。楽しく音読をくり返し、そのコツをつかんでください。

さあ、ノーミス音読をマスターしていきましょう。

音読の方法

1. 本を手に持ち、背筋を伸ばし、音読する準備をする。
2. 何行目までノーミスで読めたかを記録する。
3. 見事ノーミスで最後まで読めたら成功！

ルール

1. 少しでも間違えたり、つまったりしたら失敗。そこまでの記録を書く。
2. グループで交代して音読する場合には、一人でも間違えたり、つまったりしたら失敗となる。

応用

1. 仲間とともに、どこまでノーミスで読めたかを競い合う。
2. 時間制限を設けてチャレンジすると難易度アップ。
3. 仲間と交代しながらリレー読みをして、ノーミスゴールをめざす。

コツ

1. 呼吸を整え、よい姿勢で、しっかり口を開いて読む。
2. 少し先の文字（言葉）に目をやりながら読む。
3. 一文字一文字見るのではなく、「ひとかたまり（単語や文）」で文字をとらえて読むようにする。

レベル①『狐のつかい』新美南吉

山のなかに、猿や鹿や狼や狐などがいっしょにすんでおりました。
みんなはひとつのあんどんをもっていました。
紙ではった四角な小さいあんどんでありました。
夜がくると、みんなはこのあんどんに灯をともしたのでありました。
あるひの夕方、みんなはあんどんの油がもうなくなっていることに気がつきました。
そこでだれかが、村の油屋まで油を買いにゆかねばなりません。
さてだれがいったものでしょう。
みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。
村にはみんなのきらいな猟師と犬がいたからであります。
「それではわたしがいきましょう。」
とそのときいったものがありました。
狐です。狐は人間の子どもにばけることができたからでありました。
そこで、狐のつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。
さて狐は、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、
ひたひたとひきずりながら、村へゆきました。
そして、しゅびよく油を一合買いました。
かえりに狐が、月夜のなたねばたけのなかを歩いていますと、
たいへんよいにおいがします。
気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。

「すこしぐらいは、よいだろう。」
といって、狐はぺろりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。
狐はしばらくすると、またがまんができなくなりました。
「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌は大きくない。」
といって、またぺろりとなめました。
しばらくしてまたぺろり。
狐の舌は小さいので、ぺろりとなめてもわずかなことです。
しかし、ぺろりぺろりがなんどもかさなれば、一合の油もなくなってしまいます。
こうして、山につくまでに、狐は油をすっかりなめてしまい、
もってかえったのは、からの徳利だけでした。
待っていた鹿や猿や狼は、からの徳利をみてためいきをつきました。
これでは、こんやはあんどんがともりません。
みんなは、がっかりして思いました、
「さてさて。狐をつかいにやるのじゃなかった。」

新美南吉は、愛知県の旧制半田中学校を卒業後、小学校の代用教員時代に、児童雑誌『赤い鳥』に「正坊とクロ」「ごん狐」などの童話や「窓」などの童謡などの童話を投稿し、掲載されました。また、雑誌『チチノキ』の同人にも加わりました。
東京外国語学校英語部を卒業後、いくつかの職業を経験した後、愛知県立安城高等女学校教諭になりますが、昭和十八年(1943年)、二十九歳の若さで亡くなりました。南吉童話は、戦後も広く読まれ、代表作の「ごん狐」は、長く小学校の国語教科書に掲載されています。